

タイトル：「ナル表現」の諸相をめぐる認知言語学的研究

本ワークショップは、トルコ語、古代・現代日本語、韓国語、中国語、英語の観点から、「ナル表現」や「ナル」相当語を取り上げ、それらと話し手の認知との関わりを考察する。

1. トルコ語のナル表現・ナル動詞と日本語との相違

トルコ語は〈事態の主観的把握〉の傾向が顕著で、日本語の「ナル」や「ナル表現」に相当する形式がよく使われる。例えば「塵も積もれば山となる」はほぼ逐語的に対応する。しかし、「はい」はトルコ語では ol-ur (なる-超時制)、「いいえ」は ol-maz (なる-超時制否定)と「ナル」相当語を用い、「結婚することになりました」はトルコ語では対応する表現を欠き、「子供が歩けるようになった」は Çocuk yürü-(y)ebil-ir/ür hal-e gel-di (子供 歩く-可能-超時制/超時制 状態-与格 くる-過去形)など、「ナル表現」に相当する表現を用いる点で異なる。両言語の〈事態把握〉とナル表現の相関について対照的に分析する。

2. 古代日本語の「ナル」の意味用法と〈事態の主観的把握〉との相関について

「ナル」の用例を観察すると、上代の作品では既に「Aがナル」という「出来」の例は少なく、多くはモノを主体とした変化の例であるとわかる。その半数近くが植物など自然物が主体であり(例：梅の花実にし成りなば)、原初的に「ナル」は自然現象の変化の表現を中心に発達したと考えられる。人を主体とする変化の表現についても、こうした自然現象の観察を援用した例が多数見つかる。(例：かくしあらば梅の花にもならましものを)中古の作品になると、主体の移動が主体の〈事態の主観的把握〉に沿って「ナル」で表現される例が出始める。(例：この子は～御供に出づ。坂本になれば(薫が)「～」とのたまふ。)

3. 現代日本語の「ナル」と「ナル表現」—〈事態の主観的把握〉の観点より—

近年見られる、「こちら、紅茶になります」のような「ナル」を用いた若者特有の敬語の表現や、「カード払いもご利用いただけます」のような受益可能の「ナル表現」を取り上げて、背後にある〈事態の主観的把握〉の「ナル表現」への反映とその変容を分析する。

4. 日本語のスル動詞と韓国語の하다 (hata) 動詞から見た日韓両言語のナル性

韓国語にも日本語のスル動詞に対応する「하다 (hata) 動詞」が存在する。両語はスルには하다、ナルには되다 (toita) が対応するように見えるが、そこには微妙なズレがある。例えば、(1)に対応する韓国語は「하다」が使われず、「되다」が使われる(生越 1982)。(1) A氏が大統領に当選した。→A 씨가 대통령으로 當選되었다. この違いには両言語の主観性の違いが関与している。客観的に考えると「当選」は有権者によるのであり、A氏の力によるのではない。韓国語はこの事実注目して되다が用いられるが、日本語ではこうした事実にも関わらずスルが用いられる。本発表では一般に似ていると考えられている日韓両語にもナル性に差が見られることをスル動詞と하다動詞を対照することで明らかにする。

5. 中国語の「なる」表現—様態存在文の述語表現を中心に—

中国語には、例(1-a)(2-a)のような「場所名詞+様態を表す動詞+存在物・人」の形をとって、「どこかに何かがある様態を持って存在する」ことを語る様態存在文がある。中国語の様態存在文では、受身は使われないが、英語では受身を使わなければならないものがある。つまり、このような例から、中国語より、英語のほうが動作性を重視し、より「する」的であることが分かる。本研究はこのような言語現象を切り口に、中、日、英の様態存在文の述語表現を考察したうえ、中国語の「なる」表現の度合いを明らかにする。

(1-a) 星期天市场里挤满了人。(1-b) The market was crowded with people On Sunday.

(2-a) 壁炉上挂着个画像。(2-b) There was a portrait hung over the fireplace.

6. 英語におけるナル的表現 --- 可能表現としての *be going to* ---

第6発表では、英語の *be going to* の可能表現としての用法を検討する。ナル的表現の一特徴は、事態を招来する行為者が話し手の場合に、それが明示されないことにある (Honda 1994)。これは基本的な自己知覚を認知的な基盤として持つもので、スル的な言語である英語にもこの意味でのナル的表現は存在する。*be going to* については語用論的な通説のほか、時空間メタファによる説明がある (Honda 1991, 1993)。メタファ説では *be going to* を移動動詞 *go* の進行形と見るため、移動の原因としての話者を想定できる可能性が生じ、ナル的表現として扱えることになる。さらに、可能表現の基盤には原因帰属がある (本多 2009)。以上の観点から、*be going to* が可能表現になりうるということが説明される。

参考文献

- 池上嘉彦 1981 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
- Ikegami, Yoshihiko 1987 “‘Source’ vs. ‘Goal’: A Case of Linguistic Asymmetry”, in R. Dirven and G. Radden, eds.: *Concepts of Case*, Tübingen: Gunter Narr.
- 池上嘉彦 2003, 2004 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(1)・(2)」
『認知言語学論考』No3, 4 ひつじ書房
- 池上嘉彦 2006 「〈主観的把握〉とは何か」『言語』5月号 pp. 20-27 大修館書店
- 池上嘉彦 2008 『「する」と「なる」の言語学』を振り返って (特集=日本語文法の現在)」
国文学 : 解釈と鑑賞 73(1), 88~92, 2008/1
- 池上嘉彦・守屋三千代・テキメン・アイシェヌール 2009 「『ナル表現』再考—膠着語における事態の〈主観的把握〉の観点から—」『第10回日本認知言語学会全国大会予稿集』
- 内田賢徳 1999 「存在詞アリの意味と述語性」『森重先生喜寿記念 ことばとことのは』
和泉書院
- 生越直樹 1982 「日本語漢語動詞における能動と受動—朝鮮語 hata 動詞との対照—」
『日本語教育』48:53-65、日本語教育学会
- 春日和男 1968 『存在詞に関する研究』風間書房
- 金水敏 2006 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 釘貫亨 1998 「完了辞リ、タリと断定辞ナリの成立」萬葉 170号
- 釘貫亨 1999 「断定辞ナリの成立に関する補論—万葉集と宣命を資料として—」日本語
論究 6
- 釘貫亨 2003 「奈良時代におけるニアリからナリへの形態変化と意味変化」日本語論究 7
- 釘貫亨 2003 「奈良時代語の述語状態化標識として成立したり、タリ、ナリ」国語学 54
巻 4号
- 申雨平 1995 「汉语存在句的翻译」『外语教学与研究』1995年第2期
- 鈴木泰 1975 「中古に於ける動詞「ナル」の用法と助詞「二・ト」の相関」『国語と国文学』52-2
- 趙 蓉 2009 「日本語の『に—が』構文—存在、自発、可能などの文に関する格体制を中心—」北京外国語大学博士論文

- テキメン・アイシェヌール 2009 「トルコ語と日本語における待遇表現の実体」 『第23回
社会言語科学会研究大会』 予稿集, pp. 311-314
- 田 臻 2009 「英汉静态存在句中动词语义特征的对比研究」 『外语与外语教学』 第11期
- 東辻保和 1997 『もの語彙こと語彙の国語史的研究』 汲古書院
- Honda, Akira 1991 *A Cognitive Approach to the Semantics of Be Going To*, M.A. Thesis,
University of Tokyo.
- Honda, Akira 1993 *The GO-Future in English*, Linguistic Agency, University of
Duisburg.
- Honda, Akira 1994 *Linguistic Manifestations of Spatial Perception*, Doctoral
dissertation, University of Tokyo.
- 本多啓 2009 「日本語の無標識可能表現と英語の中間構文」 関西言語学会第34回大会
発表
- 三田村紀子 1970 「なる—「あり」と「なし」との階梯—」 奈良女子大学文学会研究年報 13
- 山口明穂 2004 『国語の論理』 大修館書店
- 山下秀雄 1986 『日本のことばとところ』 講談社